

光 文 社 時 代 小 説 文 庫

月影兵庫

長編剣豪小説

つきかりざひょうごひとりたび

^{ひと}独^{たび}り旅

南條範夫

秘





光文社文庫

長編剣豪小説

月影兵庫 ^{ひと}独り旅

著者 南 ^{なん} 條 ^{じょう} 範 ^{のり} 夫 ^お

昭和61年10月20日 初版1刷発行

発行者 大 坪 昌 夫

印刷 萩 原 印 刷

製本 光 洋 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京03 (942) 2241 (代表)

振替 東京 6-115347

© Norio Nanjō 1986

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70436-0 Printed in Japan

光文社文庫

長編剣豪小説

つきかげ ひと
月影兵庫 独り旅

南條範夫



光 文 社

目次

二百両嫌疑	五
傷だらけの宿駅	三三
高崎の怒り虫	六二
次郎太仇を討つ	九一
軽輩の恋	一二一
森の中の男	一五〇
義兄の正体	一八一
偉いお奉行さま	二〇八
帰ってきた小町娘	二四〇
花嫁人形	二六九
解脱 石井富士弥	二九八

二百両嫌疑

一

蕨わらびの宿しゆくを出て、しばらく北へ行くと、いわゆるやき米坂になる。やき米というのは、今のおこしのようなもの、それを名物にして売っている店が、何軒か並んでいた。

やがて、右手に、こんもり茂った森が見えるのが、月の宮廿三狸堂。

刈屋三蔵は、その鳥居の傍の大きなけやきの根元に腰を下ろした。

疲れたという程でもないが、歩きつづけて、少々汗ばんだので、肌をくつろげて、樹蔭を渡ってくる涼風を入れようと思ったのである。

尤も、れっきとした武士の身、あまりだらしなく胸をはだける訳にはゆかない。第一、胴巻には、大事な藩の公金二百両がはいっている。

そのせいか、江戸の外れ板橋を出てから、まだ三里とは来ていないのだが、神経を相当つか

っていた。誰をみても、怪しい奴に思われるのだ。自分が懷中に二百兩持っていることを、誰も彼もがちゃんと知っていて、そいつを狙っているような気がしてならない。

若くはあるし、腕に覚えもあるし、なに大丈夫だと自信は持っているものの、持ちつけない大金、それも自分のものではないものを持っているのだから、こちこちになっていたのも、無理はないだろう。

肌の汗を拭いつつ、自分の歩いてきた方を、何気なく眺めた三蔵の手が、動きを止めた。少し唇を突き出して、不審氣になった顔つきが、まだどこやら子供っぽい程の若さだ。

二十一歳といいながら、酒も飲まず女遊び一つしたことのない男なのである。

同藩の中村佐兵衛の娘、千世と婚約がととのって、今度役目を終えて戻れば、間もなく一緒になることになっている。

江戸の藩邸にいた間も、ここ迄街道を歩いている間も、千世のくくれ上った可愛い顎や、ぽっちゃりした手の甲などを思い出してほんのちよっと放心状態になり、気がついて自分を叱りつけたことが何度もある。

千世は、決して美女ではない。三蔵がそれを、實際以上に美化して考えているのは、彼が凡そ女というものに経験がなかったからに過ぎない。

その三蔵が、街道の方を眺めて、肌を拭う手をやめ、すっと立上ったのは、その方向から、

若い娘が、杖をひきずり、笠を傾けつつ、息を切らせて走ってくるのを見たからであった。

正しく、何者かに追われているのだ。

笠を上げて、三蔵の立ちはだかった姿を見ると、娘は、よろけるようにからだをぶつつけてきた。

「もし、お武家さま、お願いでございます、お助け下さいまし」

と、縫りつかれた刹那、三蔵の頭にびんと来たのは、

——二百両！

ということであった。

甚だ色気のない話だが、三蔵にしてみれば、それが何よりの関心事であったし、すがりついた娘の手が、危く胴巻きの上に触れそうになったせいでもある。

——男女を問わず、美醜を問わず、道中で傍によってくる奴は凡て、怪しいと思え。江戸を発つ時、上役がそう言って教えてくれた。

——ふん、おれは引っかからないぞ。

と、精々冷静を装って、女の手をそっと突き放し、

「お娘御、如何なされた」

と、自分では落着き払って言った積りだったが、残念ながら、語尾が少々震えていた。

若い娘の手に触ったのは、生れて初めてであつたし、その娘がまた、飛切りの別嬪だったからである。

千世などとは、まるで比較にならない。

色が抜けるように白く、血の色が薄く皮膚の上から透いて見える。黒い大きな瞳は、恐怖と不安とで濡れ輝いていた。顔からくるのか、きっちり締めた襟元からくるのか、物凄く良い匂いが鼻先をくすぐる。

娘は、まだ苦しそうに息を弾ませながら、後を振向いた。

「——あの男が——」

と言われて、三蔵が、その方に視線を走らせた。

けやきの大木の両側に並ぶ街道の、遙か彼方に、大柄の浪人風の男が、歩いてくるのが見えた。相当、足が速いらしい。ぐんぐん近づいてくる。

「あの男が、何かしたのですか」

三蔵は、娘が手を離したので、ほっとし、同時に、少々惜しいような気もしていた。

「はい、蕨の宿で、休んでおりました時、話しかけて参りまして、しつこくつきまといます。やき米坂で、あの男が買物をしております間に、逃げて参りましたが、何だか怖くて、怖くて——」

——何だ、そんなことか。

と、三蔵は、拍子抜けがした。

——こんな美しい娘が独りで歩いていれば、男は誰だって話しかけたくなる。自分だってそうだ。尤も、自分にはその勇気がないから、頭の中で考えるだけだろう。

「別に、乱暴なことをしようとしたのではないのですね」

「はい、でも——」

「どうかしたのですか」

「あの、私、お金を沢山持っています。二百両ばかり——」

腹の辺りを撫でるようにした。

なるほど、気がついてみれば、細っそりしたからだにしては、腰の辺りが少し膨らんでいるようだ。

「ですから、心配で——申訳ありません、はしたないことを致しまして」

——二百両。

三蔵は、吃驚した。こんな小娘が、自分と同じだけ持っているのだ。男の自分さえ、心配なのだから、娘が心配するのは、当然である。

「あの、大宮まででも、御同道頂けませんでしょうか」

娘が、近づいてくる大男の方を、氣遣わし気に眺めて言う。

「よろしい、私の側について来られるがよい」

義を見てせざるは勇なきなり——とまで考えた訳ではない。同じ二百両という金額が、妙に親近感を覚えさせたのだ。

三蔵は、両肩を張って、娘を庇うようにして歩き出した。

大男の浪人者が、すぐ背後に迫ってくるのが分る。

——何か言うか、何かし出かすか。

三蔵は、緊張し切っていた。いざといえば、刀を抜く気にさえなっていた。

浪人者が追いついてきた。

二人と、並んだ。

娘が、びくりと肩をすくめて、三蔵により添う。

三蔵の両方の眼頭が、張り裂けそうになった時、浪人者の大きな肩が、二人を全く無視して、前方に動いていった。

二

「浪人者なぞ、やっぱり、ちゃんとしたお武家さまには、手が出ないのでございますね、本当に、有難うございました」

浪人者の姿が、かなり先に行ってしまったから、娘が、三蔵に頭を下げて言った。

「いや、なに――」

三蔵は曖昧に答えた。

浪人者と一悶着起るかと、気を張りつめていたのだが、それが呆気なく無事に過ぎてしまふと、別の緊張が、今や彼を囚えていたのだ。

若い、しかも素晴らしい美女と、肩を並べて歩いているということだけで、三蔵は、からだ中の骨がぼきぼきと音を立てそうに固くなっていた。

何か話さなければいけないかと思ひながら、何を話してよいか分らないのである。たった今、知り合つた許り。共通点といつては、二百兩の金だけだ。まさか、それを話題にする訳にはゆかない。

「あなたは、何と言われる」

やっこの思ひで、そう言つてみた。

「八重――と申しまする」

「私は、刈屋三蔵だ」

聞かれた訳ではないが、対手が名乗つた以上、言わなければ悪いと思つた。

「どちらの御家中でいらっしゃいますか」

「高崎藩だ」

「あ、松平右京亮うきやうのすけさまの——」

「そうだ」

「嬉しい」

「えっ」

「私、本庄まで参ります、ずっと御伴をして、よろしゅうございましょう」

「それは——差支えないが」

「刈屋さま、始終、この街道を往き来なさいますか」

「いや、今度、江戸へ行ったのが初めてです」

と答えた三蔵は、八重が胴巻きの辺りを両手で少し揺り上げるようにしているのを認めた。

二百両は八百匁位ある、重たいのだろう。

——何故、こんな小娘が、二百両もの大金を持って、独り旅をするのだろう。

三蔵は、疑問を起した。しかし、それを口には出さない。他人の私事に余計な差出口をするのは、武士の身にあるまじき事だと教えられているからである。

浦和の宿にはいった。

「私は、大宮泊りの予定なのだが、あなたは、まだ歩けますか」

三蔵が八重の足許を見ながら言った。泥に汚れた白い足袋に、草鞋の紐が喰い込んでいるのが、痛々しく可憐に思われた。

何でもない事でも、対手が若い美しい女だと、ひどく痛ましく思われる年頃なのだ。

「大丈夫でございます、こう見えても、旅には慣れております」

「ほう」

——何故だ。

と問い返そうとして又、遠慮した。

本陣の前を過ぎると、左手に四角い石柱が建っている。表には「御免毎月二七市場足杭」、横には「天正十八年七月」と彫られてある。古いものだ。二七の日なら、賑やかな市が立ったところであろう。

「穀物や木綿ものをひさぐ商人たちが、遠く小田原辺りからも来るそうでございます」

八重が説明してくれる。

武家の娘と違って、妙に礼儀正しい固苦しい処はない。大丈夫な人と見込んだのか、かなり雄弁に、次から次へと話してくれるので、三蔵は大助かりだ。

八重の小さな唇が動いて、涼し気な声が出てくるのを横眼でちらちら眺め、音楽でも聞いているような良い気持になっている。

大宮の宿にはいった。町並十二町五十六間、戸数三百二十軒。

「私は、西小床という宿に泊ることになっているのだが」

「私も、その旅籠に泊めて下さいまし」

二人連れ立って土間にはいつて来たのを見て、宿の者が、

「いらっしやいまし、お早いお着きで——お二人さんでいらっしやいますね」

と、唄うように言う。三蔵が慌てて、

「いや、連れは連れだが、部屋は別々に頼む」

番頭が、にやっと笑った。

「へい、へい、よろしゅうございます。お隣同士のお部屋をおとり致します」

部屋を別にとって、一風呂浴びて戻ってきた三蔵が、食膳につこうとしていると、八重が顔色を変えて、走り込んできた。

「刈屋さま、怖い」

「え、どうしたのです」

「先刻の浪人者が——今、お湯から上ってこちらへ来る途中、廊下でちらっと見かけました」
四、五軒しかない宿屋なのだ。同じ方向に行くものが泊り合せたとて不思議はない。

「心配せずともよい、私がついている」

「はい、あの、お食事、こちらでさせて頂いても、よろしゅうございましょうか」

必要以上に怖がっているのがおかしくもあったが、それだけ頼られていると思えば、悪い気はしない。

「そんなに怖ければ、床につくまで、ここで話して行かれるがよい」

食事が終わってから、次々に話しかけてくる八重を見ている中に、三蔵は少し憂鬱になってきた。

つい何時間か前までは、それなりに可愛く美しく思われていた許婚の千世が、ひどく田舎臭い不器量な女に思われてきたのである。

——こんな美しい娘もいるのだ、この娘に比べれば、千世など。

と考えていると、八重が急に、

「ああ、もう四つの鐘が鳴りました。ついおしゃべりしていて申訳ありません。明日もあること、お休みなさいませ」

つと立上って、隣室に消えてゆく八重の後姿に、三蔵が重苦しい声をかけた。

「何かあったら、いつでも声をかけて下さい」

八重が、振向いてにこっと微笑んで、襖を閉め切った。

三蔵は、床についたが、容易に眠れない。隣が気になるのだ。